

日本語とりたて助辞の研究

日语强调助词之研究

明治期と現代における「な

ど」の諸形式とそれぞれの使用

頻度、テキストタイプの分布、

使用者の一般性などの側面か

ら、総合的に判断して、「など」

は、例示を表わす諸形式の中で

主に文章語に使用される中心

的な形式である。これに対し

て、「なんぞ」「なぞ」「なんか」

「なんて」は、「など」を取り巻く

非中心に周辺的な口頭語の形

式である。このことは諸形式の

意味・機能の側面から支持さ

れる。

陈连冬 著



中国出版集团



世界图书出版公司

日语强助词

日本語とり

なて助辞

の研究

常州大学
藏书

研究

著

中国出版集团
世界图书出版公司
广州·上海·西安·北京

图书在版编目 (CIP) 数据

日语强调助词之研究: 日文/陈连冬著. —广州: 世界图书出版广东有限公司, 2013. 12

ISBN 978-7-5100-7195-9

I. ①日… II. ①陈… III. ①日语—助词—研究—日文 IV. ①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2013) 第 285344 号

日语强调助词之研究

策划编辑 孔令钢

责任编辑 黄琼

出版发行 世界图书出版广东有限公司

地 址 广州市新港西路大江冲 25 号

[http:// www.gdst.com.cn](http://www.gdst.com.cn)

印 刷 虎彩印艺股份有限公司

规 格 880mm×1230mm 1/32

印 张 7

字 数 200 千

版 次 2013 年 12 月第 1 版 2014 年 6 月第 2 次印刷

ISBN 978-7-5100-7195-9/H·0837

定 价 35.00 元

版权所有, 翻版必究

はじめに 本研究の概要と構成

本研究『日語「強調」助詞之研究』^①の目的は、現代日本語のとりたて助辞の中から、「など」「なんぞ」「なぞ」「なんか」「なんて」の諸形式を取り上げて、次のような立場から記述を行うことにある。

①明治期と1980年以降の現代の両時期における諸形式の使用実態を調査し、両時期におけるそれぞれの形式の意味・機能の違いを明らかにする。

②文学作品から収集した実例に基づいて、それらの意味・機能を帰納的に記述する。

周知のごとく、本研究で取り上げる諸形式については、伝統的な国語学において、長年にわたって、「副助詞」や「係助詞」の一部として注目されてきた。また近年、欧米の言語学の影響を受け、日本語を世界のさまざまな言語の中の一つとして研究する日本語学においても、「とりたて」と称されて、盛んに研究されている。このため、本研究で取り上げる諸形式に関連のある先行研究は、莫大な数にのぼる。

しかし、歴史的変化に関する研究は、明治期以降についてはあま

① 中国語の書名にある「強調」とは、日本語の「とりたて」の訳である。世間的にみんなが受け入れる訳とは限らないが、暫定的に使っている。「焦点」と訳す人もいる。

りなされていない。湯澤(1957)、此島(1966)は、明治期以前が中心となっている。

また、最近の研究は、内省によるものが多い。実例によるものでも、全用例を収集していないため、中心的な意味・機能とそうでない意味・機能とが、同等に扱われていたり、あるいは非常に珍しい用法を中心的な用法として扱われていたりする。

さらに、今までの研究では、上記の諸形式を、類義形式として認めてはいるものの、諸形式の間の違い、そして特に諸形式の間のかかりについては、あまり研究されていないと思われる。時代の推移に伴って、諸形式の中のある形式の意味・機能に変化があれば、当然類義形式の間における役割分担の再調整が起こる。形式上の違いに留意して用例を収集し、これに基づいた忠実な記述を行えば、類義とされる諸形式の意味・機能の相違を正確に捉えることができるであろう。

そこで本研究では、実例に基づき、それぞれの形式の用法と使用実態を再確認し、両時代の間の違いを究明し、従来指摘されてきた「例示」と「否定的評価」という二つの中心的な用法の間の連続性も含め、5つの形式とそれらの意味・機能を総合的に捉えていきたい。

本研究の記述を、簡単にまとめると、次のようになる。

明治期と現代における諸形式のそれぞれの使用頻度、テキストタイプの分布、使用者の一般性などの側面から、総合的に判断して、「など」は、例示を表わす諸形式の中で主に文章語に使用される中心的な形式である。これに対し、「なんぞ」「なぞ」「なんか」「なんて」は、「など」を取り巻く非中心＝周辺の口頭語の形式である。このことは諸形式の意味・機能の側面から支持される。

中心的形式で文章語の「など」の意味・機能は、次のようにまとめられる。

格助辞を伴う＜非単独用法＞は、明治期と現代との間に違いが見られない。その意味・機能は基本的に＜例示＞である。

格助辞を伴わない＜単独用法＞は、明治期にはほとんどなく、現代において激増している。その意味・機能は、＜否定的評価＞である。

「など」は明治期には主に＜例示＞という客観的な意味・機能のみを表わしていたが、現代になって、＜例示＞と主観的な＜否定的評価＞の意味・機能を併せ持つようになっている。

他の諸形式—「なんぞ」「なぞ」と「なんか」「なんて」—は、「など」と比較した場合、限られた意味・機能、あるいは限られた時期に集中する特徴が見られる。

各形式の意味・機能は以下のようになる。

「なんぞ」

明治期の「なんぞ」は、基本的に格助辞を伴う＜非単独用法＞で、＜例示＞の意味・機能を果たしていた。＜単独用法＞によって表わされる＜否定的評価＞も観察されたが、使用頻度はきわめて低かった。

現代に残っている僅かな用法は、逆にほとんどが＜単独用法＞によって表わされる＜否定的評価＞である。

「なぞ」

「なんぞ」と同様で、明治期は基本的に格助辞を伴う＜非単独用法＞で表わされる＜例示＞の用法であった。＜単独用法＞で表わされる＜否定的評価＞は、「なんぞ」より更に少なかった。

現代に残っている僅かな用法は、＜否定的評価＞のみである。

「なんか」

「なんか」は、「なんぞ」「なぞ」と正反対で、明治期の意味・機能は《否定的評価》が主で、《例示》は副次的であった。

現代においても、この構図は変わっていないが、《例示》の使用頻度が増加している。

「なんて」

明治期には従属文接続中心であった「なんて」が、現代においては従属文にも名詞にも接続する形式になっているという点では、他の諸形式への接近も見られるが、意味・機能の面では、「なんか」に似て、明治期と現代とで一貫して《否定的評価》を基本的なものとしている。

ただし、「なんて」は、副次的な意味・機能として《肯定的評価》も表わす。

一方、他の諸形式にある《例示》の用法は、「なんて」には見られない。

以上の各形式の記述を踏まえて、諸形式の相互関係を、次のようにまとめている。

文章語において、「など」は、明治期には《例示》のみを表わしていたが、現代になって《例示》と《否定的評価》の両意味・機能を持つ形式へと発達した。

これに対し、口頭語においては、《例示》を表わす「なんぞ」「なぞ」が、《否定的評価》を派生する代わりに、新たな形式—もっぱら《否定的評価》の意味・機能を果たす「なんか」「なんて」—を導入して、《例示》と《否定的評価》の対立を構成していたことになる。

ただし、現代になってから、勢いのある「なんか」が、未発達であ

った《例示》の意味・機能を発達させ、現代では使用されなくなった「なんぞ」「なぞ」の役割をもカバーするようになっている。「なんて」は従属文だけでなく、名詞にも接続するようになり、《否定的評価》を表わす形式として幅広く使用されるようになっている。その結果、口頭語においては、《例示》の「なんか」対《否定的評価》の「なんて」という、新たな意味・機能における相補的な対応関係が構築されつつあると思われる。

本研究では、3つの部分に分けて、上のことを論証していく。

まず、「第1部 序論」においては、本研究に関連のある先行研究を概観し、代表的な先行研究を紹介する。その上で、本研究の基本的な立場と方法論を示し、主要な用語を説明する。そして、調査を行ったテキストの範囲、調査の結果を示す。最後に、これから考察、分析していく対象とはどういうものなのか(対象外の用例はどういうものなのか)を説明する。この第1部は、本論となる第2部の個別的な記述の前提となるものである。

「第2部 本論」は、本研究の記述的な側面を構成する。対象とする五つの形式について、中心的な形式を先に、周辺の形式を後に、明治期と現代の順で記述する。そして、各形式について、当該形式の中で主要な用法を先に、主要でない用法を後に、記述分析していく。第一節から第五節にかけて、それぞれの形式の中心的な用法を一通り考察し、それぞれの形式の意味・機能を明らかにしていくことになる。第2部は、次の第3部の結論に結びつく土台をなす。

「第3部 結論と今後の展開」では、第2部の記述を踏まえて、5形式を総合的に概観しつつ、本研究の結論を述べる。そして最後に、今後の展開の可能性として、文法化との関わりを述べる。

目 录

第1部 序 論.....	1
第1節 本研究の目的	1
第2節 先行研究	2
第3節 とりたてとは	13
第4節 本研究の方法	17
第5節 本研究の用語	19
第6節 調査の対象	22
第7節 調査の結果	26
第8節 分析の対象	34
第2部 本 論.....	35
第1節 「など」における明治期と現代の比較.....	35
第2節 「なんぞ」における明治期と現代の比較.....	71
第3節 「なぞ」における明治期と現代の比較.....	87

第4節 「なんか」における明治期と現代の比較.....	99
第5節 「なんて」における明治期と現代の比較.....	124
第3部 結論と今後の展開	157
第1節 結 論	157
第2節 今後の展開—文法化—.....	160
参考文献.....	185
資 料	208
謝 辞	209

第1部 序 論

第1節 本研究の目的

前述のように、本研究の目的は、現代日本語の〈とりたて〉の中で、《例示》を表わすとされる「など」とその類義的な文法形式「なんぞ」「なぞ」「なんか」「なんて」について、明治期と現代とを比較しつつ記述することである。本研究では、次のような手順で、本論に入っていきたい。

まず、関連のある先行研究を概観する。その中から、本研究に特に深く関わる研究を、現代語に関わるものと歴史的変化に関わるものとに分けて述べる。

次に、先行研究を踏まえて、〈とりたて〉とは何か、という問題を考える。従来述べられてきた内容を確認した上で、本研究の方法論について述べる。そして、本研究のキーワードとなる語に説明を与えていく。

最後に、本研究で実際に調査した明治期と現代のテキストをあげ、そこから収集した用例の量的分布を示す。

第2節 先行研究

まず、発表の年代順に、助辞用法の「など」を始めとする諸形式を扱った代表的な先行研究を一覧化し、次頁に【表 1】としてあげる^①。著書、論文、辞書類があるが、分類が困難な場合もあるため、特にこれらの区別をせずに、まとめている。

このうち、本研究に特に深く関わる先行研究の概要を以下にまとめる。現代語の共時的分析に関わる研究と歴史的変化に関わる研究に分けて示す。

1. 現代語に関わる研究

主要なものについて、発表年順に概略を述べる。

佐久間鼎(1940)『現代日本語法の研究』くろしお出版(改訂版、1983)

佐久間(1940:316)は、「など」「なんぞ」「なんか」「なんて」を副助詞とし、その意味について、次のように記述している。

①それとははっきりいわずに、おおざっぱにいう場合は、「くらい」と同じようになる。

①【表 1】で、当該形式についての記述があることを「○」で示している。ただし「なんぞ」以下の形式については、直接記述がなくても、「など」の異形態として同等に扱っていると明記している場合、その形式にも「○」をつけている。「―」は該当する記述がないことを示す。

【表1】先行研究一覧表

文 献	形 式	な ど	な ん ぞ	な ぞ	な ん か	な ん て
山田孝雄(1922)『日本口語法講義』		○	—	—	—	—
松下大三郎(1930)『標準日本口語法』		○	○	○	○	—
佐久間鼎(1940)『現代日本語法の研究』		○	○	—	○	○
国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』		○	○	○	○	○
湯澤幸吉郎(1957)『江戸言葉の研究』		○	○	○	—	—
此島正年(1966)『国語助詞の研究—助詞史素描一』		○	○	○	○	—
松村明(編)(1971)『日本文法大辞典』		○	○	○	○	○
森田良行(1980)『基礎日本語 2—意味と使い方—』		○	—	—	—	—
日本語教育学会(編)(1982)『日本語教育事典』		○	○	—	○	○
奥津敬一郎・沼田善子・杉本武(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』		○	—	○	○	—
沼田善子(1988)「とりたて詞の意味再考」		○	—	○	○	—
山口堯二(1988)「副助詞「など」とその周辺」		○	—	—	—	—
村田年(1990)「「なんか」の用法①—接続の形態から—」		—	—	—	○	—
寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』		○	○	—	○	○
植田瑞子(1991)「現代語における副助詞ナドの分布と特性」		○	○	○	○	—
井上優(1993)「日本語の「ぼかし表現」をめぐって」		○	—	—	○	○
山田敏弘(1995)「ナドとナンカとナンテ—話し手の評価を表すとりたて助詞—」		○	—	—	○	○

【一語典と他語一語典性・語彙の語彙性】(1987)国語学雑誌

続表 1

文 献	形 式	な	なん	な	なん	なん
		ど	ぞ	ぞ	か	て
中西久美子(1995a)「ナド・ナンカとクライ・グライー低評価を表すとりたて助詞一」		○	—	—	○	—
加波尚子(1995)「副助詞「など」について」		○	—	—	—	—
丸山直子(1996b)「話しことばの助詞—「とか」「なんか」「なんて」—」		○	—	—	○	○
Katsuya Kinjo (1996) A study of the Japanese Particle nante:Its Meaning and Pragmatic Functions		—	—	—	—	○
グループ・ジャマシイ(編著)(1998)『日本語文型事典』		○	—	—	○	○
Satoko, Suzuki (1998) Tte and nante:Markers of psychological distance in Japanese conversation		—	—	—	—	○
金水敏・工藤真由美・沼田善子(2000)『日本語の文法2 時・否定と取り立て』		○	○	○	○	○
山崎誠・藤田保幸(2001)『現代語複合辞用例集』		—	—	—	○	○
日本語教育学会(編)(2005)『新版日本語教育事典』		○	—	—	○	○

②並べてあげた事物の後につけて、その他の同じ種類のものをこめていう場合は、「等」「エトセトラ」にあたる。

③更にここから、それらの事柄を軽く見てあまり問題にしないという態度を示す用い方も出てくる。

④また、現代の口頭語では「なんか」「なんて」の方に変わりつつあること、これらの口頭語に用いられる形式はことに物事を低く評価する態度の場合によく用いられる。

国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』

国研(1951:131、永野賢氏執筆)は、「など」「なんか」「なぞ」「なんぞ」を副助詞とし、一括してその意味用法を次のように記述している。

①例示と総括 (イ) 一つの事物を例示する。それとはっきりきめず、おおざっぱに言う。他の同種類のものが言外にこめられる事もある。(「例えば」の意) (ロ) 並べ挙げたいいくつかの事例の後につけてこれを総括し、また、他の同種類のものをもこめて言う。

②ある事物を例示し、それを軽しめて扱う言い方。(否定的な内容または反語的な内容を表現し、もしくは、けんそんした言い方をする時に用いられる)

森田良行(1980)『基礎日本語2』

辞書形式の森田(1980:363)は「など」について、助詞として次のように記述している。

①取り立て：「例えば A など」と、その話題に適合する A を取り立てて提示する。

②例示：すべてを挙げないでその中の幾つかを例として示す。

③強調：打消し、もしくは打消しの表現と呼応して、その否定を強める。

④軽視・謙遜：取り立てた事物を否定することによって、その事物が今の話題に適合しないことの強調となり、結果的にそれへの無視・軽視となる。他者を対象とすれば軽視・軽蔑、自身を対象にすれば謙遜となる。

村田年(1990)「「なんか」の用法①—接続の形態から—」『日本語と日本語教育』第19号

村田(1990:31)は「なんか」を取り上げ、接続する形式の品詞によって4つに分類している。

- ①動詞との結びつき
- ②形容詞との結びつき
- ③副詞との結びつき
- ④名詞との結びつき

そして「なんか」と結びつく文法的な形態とは何か、すなわち肯定か否定かという視点から考察し、その結果を次のようにまとめている。

(a)①②③は全て否定述語と呼応する。

(b)④も基本的に否定述語と呼応し、形態の面から肯定であっても意味的には否定の表現であるものが多数見られる。

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味』第Ⅲ巻

寺村(1991:181)は主に「など」を取り上げているが、くだけた会話では「なんか」「なんぞ」および「なんて」も用いられると指摘している。そしてそれらの表現機能の違いによって、接尾辞と取り立て助詞に分けて、次のように説明している。

①接尾辞の用法は、いくつか同類の名詞(A,B(C,D……))を並べた後につけて、＜……のような種類のもの＞の意味を添えるものである。

②取り立て助詞の用法は、ただ一つの名詞(X)につくこともあり、その場合、単に＜そのような類のもの＞という意味を添えるのではなく、＜「XについてPであること」が、現にあること、あるいはかくあるべしと自分が思うことから、とんでもなくかけはなれている＞という影の評価的な意味が生じることがある。

また、接尾辞と取り立て助詞に分けるに当たって、それぞれの統語的特徴を次のように指摘している。

①接尾辞の場合は、特定、不特定のどちらの名詞にも付くが、取り立て助詞の場合は特定の名詞か、総称的に使われた名詞にのみ付く。

②接尾辞の場合には、述語の種類に特に制限がないのに対して、取り立て助詞の場合、述語には否定的評価が伴う。

植田瑞子(1991)「現代語における副助詞ナドの分布と特性」『日本語学』10-5

植田(1991:77)は、ナド(ナゾ、ナンゾ、ナンカ)の用法を前接要素によって五つに分類している。

I 類 X+ナド+格助詞：格成分

II 類 X+格助詞+ナド：格成分

III 類 X+ナド(格助詞省略)：格成分

IV 類 X+ナド：非格成分(更に(A)(B)(C)に下位分類する)

V 類 X+ナド+ダ・デス：述語成分

更に前接要素 X の数——一つの場合を単独用法と呼び、2 つ或いはそれ以上の場合を並列用法と呼ぶ——と、述語の形態——肯定なのか否定なのか——という観点も絡めて、次のことを指摘している。

① I と IV の(A)——時の名詞——と(B)——同格——は、肯定文・否定文に現れ、準体機能①を持ち、例示を表わす。

② II と IV の(C)——「楽しくなんかない」や「怒ったりなんかしない」、及び「ゆっくりなどしてられない」などのような語と語の間に割り

① 「準体機能」は、基本的に宮地裕(1952)の規定に従っていると思われる。準体機能とは、上に体言または連体形態を置き、これとともに、全体で、体言的語句を構成する末尾の要素として働く機能である。体言に対して或る限定を加えるものとなる。